

UIFA JAPON NEWSLETTER



No.77 Nov. 25, 2008

■主な内容

第44回海外交流の会報告 「象徴の構築とサステナビリティ」
東京オリンピックから北京まで；44年間のさまかわりと今後

- ・変化していく住宅団地
- ・東京の変節を映す水辺
- ・高層建築の行方

特集：UIFA 世界大会と中原暢子先生

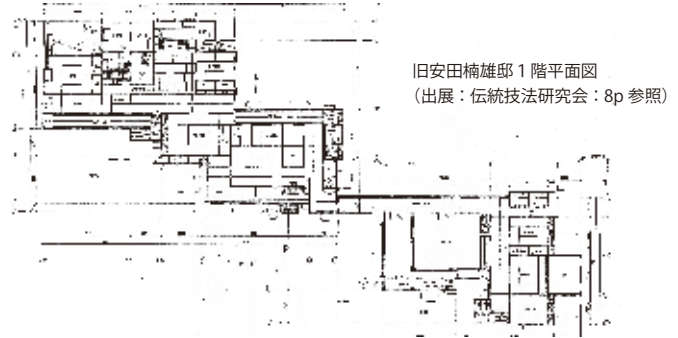
会員の本「鎌倉『まちのいろは』」

魅力的なりノベーション No.2「旧安田楠雄邸」

見守りチーム「オープンガーデンモニターツアー」に参加して

ASFA組の活動「ふにやとさかにゃの Welcome Toilet」

役員会報告



旧安田楠雄邸 1階平面図
(出展：伝統技法研究会：8p 参照)

■ 第44回海外交流の会 報告

「象徴の構築とサステナビリティ」

～オリンピック都市、北京&ロンドンから学ぶこと～ 参加記
三上 紀子

北京オリンピックの興奮もまだ醒めぬ9月6日、新日鉄代々木倶楽部において29名の参加のもと第44回海外交流の会が催されました。講師の白井宏昌氏は世界で活躍する若手建築家です。オランダのOMA事務所のアキテクトとして北京の中国中央電子体— CCTV 本社ビルの国際コンペに参画され、北京オリンピックと共に変わる中国の建築事情をリアルタイムで見てこられました。驚くべきスピードで変貌していく北京の都市やリアルタイムで世界に発信されるアイコンック・ビルディングの様子など、多くの画像と臨場感あふれるお話しに興味がつきません。



白井宏昌講師 (写古)

さらに白井氏はオリンピック建築の研究者の顔もお持ちで、国際オリンピック委員会助成研究員もつとめられています。明晰な分析と的確な考察を通して、オリンピック都市が抱くグローバルな野望とその裏に潜むローカルな課題についてもご指摘くださいました。

“新しい時代”の象徴として戦略的に「ブランディング・ツール」として扱われ建設されてきたオリンピックの建築・都市空間。これからは、「アイコン（象徴）」と「サステナビリティ」—この2つをいかに成立させる道を見つけるのかが大きな課題だとのこと。実際2012年のロンドン・オリンピックでは既にオリンピック後を視野に入れた、これまでとは全く異なるアプローチで計画が進められているそうです。ハードからソフトへの転換、それは、オリンピック建築の新たな幕開けを意味しているともいえるのでしょう。

さて、それに続く2016年東京オリンピック（候補）。ここではどのような戦略がとられるのでしょうか？4年に一

度の世界の祭典オリンピックという大舞台は、都市と建築との関係を見つめ直す素晴らしい機会でもあるのです。地球規模でのサステナビリティが社会的関心となり、都市・建築に求められるパラダイムが大きく変わろうとしている中、＜変化する環境＞として都市をとらえ、その変化に対応可能なひとつのシステムとして建築を創る。そのためには、これまでの都市・建築といった既設の領域にとらわれるのではなく、より横断的で多様なコラボレーションが必要なのです。そしてこれは、オリンピック都市といった大きなスケールのみならず、住まい・まち・暮らしといった私達が日頃関わっている対象においてもあてはまることなのかもしれません。

真の「サステナブル」とは？ 真の「象徴」とは？ 今を生きる私達建築家一人一人が考えなければならない命題なのだ、改めて感じた熱い2時間でした。



CCTV 本社ビル



(写：白井) サステナビリティとこの鳥の巣の今後は？

44th International Exchange Lecture: Iconic Buildings and Sustainability

MIKAMI Noriko

Mr. SHIRAI Hiromasa, a young architect who is active around the world, was the presenter of the 44th International Exchange Lecture on Sept. 6, 2008. He introduced the rapid transformations in Beijing and discussed the people's ambition and local challenges in Olympics cities. He argued that city authorities should make their iconic buildings sustainable after the Olympic Games. In Tokyo, a candidate for the 2016 Olympics, we need to design iconic buildings that are truly sustainable, but we must also create sustainable homes, communities, and lifestyles. (N.K)

第45回 海外交流の会のお知らせ 「世界遺産ベトナムホイアンのまち並み保存と生活の変化」

講師：篠崎正彦 東洋大学工学部建築学科准教授・博士（工学）

2008年12月6日（土）14時から16時半

場所：東洋大学白山校舎6号館1階第3会議室（白山通り側西門近く）

ベトナムの町並みと建築がご専門で、居住された経験もある、篠崎正彦先生にお話いただきます。東洋大学生会館での懇親会もご参加ください。

■ 変化していく住宅団地

吉田 洋子

東京オリンピックと集合住宅の建設を見ると建設資材が不足して海砂利が使われたなどという問題も思い出されるが、そういったマイナスの話ではなく、もともとの自然を生かした住宅建設への転換が再検討されるようになったプラスの面も挙げられる。既存の樹木を残したり、表土を大切に住宅地ができた後、早い時期に緑が復元するようといった整備の方法に転換した時期でもあった。

その時代から早や44年、現在の集合住宅はどのような住環境になっているのだろうか。緑が多く落ち着いた住環境についての居住者の評価は高い。しかし様々な課題が生じていることも事実である。



子ども達によるプランター作り

まず一番大きな問題は少子高齢化である。ニュータウンなどでは順番に入居していくので年齢構成はバランスよくなっていくはずだと計画された。しかし、近年問題になっているのはブロックでみると異常に少子高齢化の進んだ街区が現れているということである。最も、住環境に対しての

評価が高いので住み続ける人が多いということから起きてきている現象ではあるので皮肉といえば皮肉な現象である。エレベータがないこと、緑を残すために地形も保全したのでアップダウンの多い街で、高齢になって車が使えなくなると移動しにくい。少子化による小学校統廃合、子どもむけに設計された公園は高齢者には使にくいなどの問題も出ている。もっともある時期、駐車場の増設問題と緑の両立が集合住宅では課題であったがあるピークを過ぎた後は、駐車場も余るように変化してきている。

次に、美しい緑も大きくなりすぎて手入れの費用もかさむようになり、街路灯なども樹木で隠れてしまい、夜間の安全面で問題な街になってしまったりしている。

モーターゼーションなど生活様式の変化などから、まとめ買いとなり、女性の社会進出などから、徒歩圏に作られた店舗は、駅前や沿道型の店舗との競争に負け廃業に追いやられてしまっている。生鮮三品が近隣で揃わないため、悪循環が続く。しかも高齢化になると移動が困難になり生活必需品が徒歩圏で揃わないのは本当に困る事態になってきている。

しかし一方、市民の力は増してきている。PTAなどをきっかけに様々な活動をひろげている女性たち。自分たちの生涯学習、子育ての活動そして高齢者の支援など幅広い。また男性も負けてはいない。定年になった後、緑の保全の活動や様々なNPO活動など。最近空き店舗を活用した拠点を持つ活動も広がってきている。近隣の商店街によっては今までのような一般の商店ではなくNPOやデイサービスや学童保育、障がい者の作業所などの立地ラッシュ



空き店舗を利用した障がい者の作業所

になっているところも表れている。公園のようなところも行政が作るだけでなく、市民自らがプレイパークの運営をしたり、ビオトープ作りを行なったり多様になってきている。

今後、集合住宅の再生や建て替えの問題も生じてくるわけだが、こういった市民の活動が上手く活かされた住環境のあり方が検討されていくことが重要ではないか。市民の英知が期待される。

■ 都市の変節を映す水辺

須永 倭子

東京オリンピックと水辺というとすぐ思い浮かぶのが、日本橋の光景である。手すりに取り付けられた、9.14mの街路灯が高速道路に突き刺さっている。1964年開催の東京オリンピック5年前、道路整備が急務とされ、用地確保の手間を省いて既存の道路や河川の上空が使われることとなった。その結果このような奇妙な風景が出現した。

日本橋川から魚などの荷揚げをしていた魚河岸は震災後築地に移転していた。しかし当時まだ河川舟運は生きていた。今はホテルに変わった飯田町貨物駅は、日本橋川に隣接し、届いた材木はアバという仕切りの内側に浮かべられた。「丸太を筏に組んで日本橋川を下り、隅田川を渡って猿江（江東区）にあった営林署の堀まで運んだ」とは今は廃業した川並（筏乗）の話である。日本橋川は江戸からの舟運の幹線。そこに高速道路の柱が立てられ、河川の利用もこの時を境にほとんどなくなる運命となった。

オリンピック前から始まった高度成長期、経済活性化と共に水辺が工場廃水などで汚れ、公害問題の深刻化も人々を川から遠ざけた。オリンピックの翌年には公害審議会が設置され、1967年には大気汚染、水質汚濁などに対応する公害対策基本法が制定された。戦後すぐの水辺は、工場も操業できず、澄んでいたそうである。水辺は公害の受け皿にもなっていた。当時の建物は川に背を向けた。日本橋川は上流部の排水路だったが、そうした役割の無いものは埋め立てられるという運命をたどった。

街が肥大するとともに海側を埋め立てて、内陸側にあった工場が湾岸側に移るということも行われた。港湾側は、荷役の便もあったからである。内陸側の工場跡地は土地の高度利用が図られ、



日本橋川からみた日本橋

Changes in the Living Conditions at Housing Complexes

YOSHIDA Yoko

At the time of the Tokyo Olympics in 1964, planning of housing complexes was reexamined and more natural landscaping was incorporated. Now, residents appreciate their 40-year-old complexes because of the rich greenery and calm surroundings. However, at the same time, various problems have arisen. First, with the growing proportion of elderly, it has become difficult for some senior residents to come and go in areas where the terrain was preserved, ironically, to utilize nature. Second, the large trees cost too much to maintain and the rich greenery makes the complexes unsafe at night. Last, neighborhood commercial districts have declined as a result of competition from outside.

Nonetheless, citizens are revitalizing the housing: women's lifelong learning groups and retired men's nonprofit organizations (NPOs) have a positive impact, the NPO offices and daycare centers for seniors fill the empty storefronts, and citizens groups have renovated public parks.

We are looking forward to seeing what citizen expertise will bring to the future. (N.K.)

The Tokyo Olympics and Its Impact on Waterfront Scenery

SUNAGA Yoshiko

When I think of the 1964 Tokyo Olympic Games, I always remember what it used to be like in Nihonbashi, with its famous bridge over the Nihonbashi River. Now, a 9.14m high street light shines on an expressway directly above the bridge. The overhead expressway was constructed five years prior to the Olympics in order to avoid purchasing land, and the riverside scenery has been strange ever since. The river was still used for transportation before the Olympics, but when the columns of the expressway were built, all the boats disappeared.

The riverside became polluted with industrial effluent, and the aggravation of the environmental pollution issue also kept people away from the river. A pollution council was set up, and in 1967, a Public Nuisance

高層の集合住宅がどんどん建てられて人口を吸収した。猿江の営林署の堀も木場の堀も埋め立てられ、増えた住民のための公園となった。住環境は整えられていったが、水の都のイメージは消えた。高度成長期は、明治から昭和初期にかけての名残がどんどん消えていった時期でもある。あまりにも性急な変化には、功罪両方があった。

下水道整備や工場の移転により、水辺の水質もどんどん良くなってきた。見かける魚の種類も増えてきた。そして1986年頃から始まったバブル期。土地の価格が高騰。土地の高度利用がますます進み、超高層の建物が続々と出現する。これはバブル崩壊後の経済政策としても続けられた。最近では工場跡地を超高層住宅に変え、ショッピングモールと一体化した開発も行われ、船で各街を結ぶということも行われている。水辺の超高層マンションは眺望の良さから人気で広告でも売りとされているが、水辺と内陸側の障壁となっているケースも多い。視界を遮るだけでなく、空気の流通も妨げている場合もある。



晴海運河から見たラポート豊洲

東京オリンピックが一つの変化点となり、その後の日本経済は世界のトップクラスにまで発展した。今では日本の生産拠点の多くが海外へ移った。搬入に便利だった湾岸には、とり残された埠頭や倉庫などこれから変わる可能性のある空間が多く存在する。ウォーターフロント活用がまだうまく進んでいるとは言いがたい今日、これまでの経験を下地として上手な水辺環境作りを考えていきたい。

■ 高層建築の行方

松岡 拓公雄

高度成長期、東京オリンピックが開幕するころ、私も未来都市を夢見ていた少年の一人。「超高層の曙」と映画になった霞ヶ関ビルに端を発し、世界貿易センタービル、京王プラザホテルと次々に超高層が立ち上がって行く姿に未来を感じた。それから44年後、オリンピックに向けて北京や上海は急激な都市化を迎え、出現した街は少年時代の夢見た姿そのものであったが何ら感動がない。今、毎週新幹線での移動生活になり、車窓から変容する都市の風景はみな同じようで憂いている。この間、私自身の未来都市像は変わってしまった。

丹下事務所でのシンガポールでのオフィスビルや東京都庁などいくつもの超高層のデザインに関わる事が出来た。都庁のコンペ時はまだ手描きの時代、大勢で手分けして図面を描いていた、そんなに昔の事ではない。大型コンピュータを導入したが、機能は今のパソコン以下、ワイヤーフレームで外観パースを描きそれを珍重した。

近年は、六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、東京駅周辺のように、

複合化した再開発は高層化し、ここ10年で数百の超高層が全国で雨後の筍状態である。良い意味では高層化により設計手法・建築技術は進化し、特に耐震性・耐風圧・高気密・高水密性などの技術は今や日本が世界のトップにあると言っても過言ではない。これにはコンピュータの猛烈な進化なくしては成し得ないことだ。もはや不可欠の道具であるが、デザインは今まで描けなかった造形を可能とし、ヒューマンスケールを超えて、クールな未来へ一気に世界を塗替えていく。その結果、経済成長国の高層建築はデベロッパーの看板となり、奇妙な造形操作で差別化、形態やファサードはファッション化しているのが世界の傾向である。日本では厳しいコストパフォーマンスに採まれ、無理、無駄をしない構造やプランニングを強いられ、設計者は素材の耐候性や強度の限界に挑戦させられる。逆に無難でつまらない無愛想な顔つきの高層ビルが多く、これも憂いの一因だろう。独立してから用賀の世田谷ビジネスセンターを経て、現在札幌で超高層に携わっているが、建築をとりまく環境は大きく複雑に変化していることに気付く。ようやく化石燃料の限界、地球温暖化の危惧が浸透してきたからだ。こぞって自然エネルギーの活用、環境への負荷低減など環境対応技術に取り組むことを余儀なくされている。JIAから



ドバイの日本領事館から高層建築群を見る。超最高 850m は雲を抜けるか？

環境建築憲章が新たな設計指針として提示されたが、計画者はそれらを免罪符として売り物にし、技術をトッピングしていく。宗教・権力・経済そして今は「環境」と、高層ビルにその時代が映し出されて形となり象徴的に扱われる。

かつてコルビジェは、人のために公園のようなオープンスペースを獲得した超高層のある都市空間を未来として見せた。しかし私たちは、ただ高密度化のためだけに街が高層化した事に気付いている。汐留再開発で建並ぶ高層ビル群による海風の遮断は記憶に新しいが、予測した高齢化社会に適した住みやすい都市になっているだろうか。少子化で人口減少が始まった未来の都市に高層ビルは相応しいのだろうか。何故高層建築なのか。住み良い、働きやすい気持ちの良い空間は高層でなくとも得る事が可能な時代である。私たちは何か忘れ物をしていないか。憂いの要因は複雑だ。建築家として負の方向に高層建築が加担していないことを祈る思いだ。(滋賀県立大学教授・アーキテクトシップ主宰)

Countermeasures Law corresponding to air and water pollution was enacted.

The factories in the inland areas moved to the Tokyo Bay area because of the convenience of loading. The old inland factory sites were soon replaced by multistory housing complexes. The image of Tokyo as a capital city on water disappeared. The buildings and scenery of the Meiji to Showa eras were rapidly replaced during the ensuing years of high growth. There have been both advantages and disadvantages as a result.

Recently, the bay area has changed again. There are now high-rise condominiums with shopping malls, and each area is connected by boat. But the buildings sometimes cause problems, such as cutting off the view and disturbing the circulation of air. The Tokyo Olympics was a turning point, and the Japanese economy thereafter developed into a world leader. Many manufacturers in Japan have moved to foreign countries now and many factory spaces have become vacant with the possibility of future use. We should take this opportunity to make the best use of Tokyo's waterfronts. (A.T.)

The Role of Skyscrapers in Our Cities

MATSUOKA Takuo
Guest Columnist

It was every boy's dream to see skyscrapers sprouting up all over Tokyo during the epoch of the Tokyo Olympics in 1964.

When I was drawing the designs for the Metropolitan Office Complex under TANGE Kenzo, the computers were huge. But now the development of the PC has allowed us the flexibility to design a variety of forms, even if they are out of scale. Systems are now so convenient that developers force us to meet economic planning demands without considering tenants' needs. The Japanese have developed the latest technology for seismic and atmospheric sealing solutions. The history of high-rise buildings is a reflection of our times, which started from cathedrals (religion) → castles (power) → towers (economics). Facing global warming, now is the time to focus on the environment. Le Corbusier proposed that open space is the final aim of the multi-storied building. But we now have only high-rise cities, fewer parks and far more senior citizens than children. Can skyscrapers afford us comfortable lives and spaces? The answers are complicated, but I'm still hopeful. (A.N.)

(Matusoka is Professor, Shiga State Univ.; President, Architectship)

特集：UIFA 世界大会と中原暢子先生

国際女性建築家会議がパリで初めて開催されてから45年、15回13都市で活発な議事と華やかな国際交流が続いてきました。中原暢子 UIFA JAPON 前会長と共に参加した会員からのレポートを年代に沿って綴ります。

● 第1回パリ大会

草野 智恵子

1963年の初め、のん子さんから電話があった。「今年7月に女流建築家国際会議がパリで開かれるんだけど、おちえさん一緒に行かないかい？」「行きたいけど、浜口ミホさんや林さん、山田さん達がいらっしゃるじゃない。」「彼女達は、亭主持ちだからだめなんだよ。」「行きたい！」と私。話は決まった。

のん子さんは南周りの船で行くと5月に出発。私は仕事の都合で6月にアンカレッジ経由の飛行機で出発した。のん子さんのご親戚のフランス公使が、自邸の近くにあるホテルパッシーに部屋を取って下さった。6月末、私達はそのホテルで落ち合った。

7月初め、会議が始まった。のん子さんは日本の女流建築家の設計した建築作品を、私は日本の代表的建築物をスライドで発表した。会議が終わった翌日はノートルダム寺院やパリ市庁舎などの見学だった。市庁舎ではのん子さんが日本代表として芳名帳にサインした。とても堂々としていらして、私まで誇らしく感じた。パリ郊外の集合住宅建設現場、シャンパン工場の貯蔵庫、化粧品会社(ランコム)の工場の見学が続いた。

夕方からセーヌ川の観光船でのパーティーに、私達は和服で出席した。パーティー会場で林のり子さんと会い、夜は中央市場(現ポンピドーセンター)にオニオングラタンスープを食べに行こうということになった。私達着物組みは目立ったようで警官もニコニコ手を振っていた。

パリ滞在も少し長くなり、ご飯が食べたい！と、アルコールランプとお鍋、お米を買って、浴室でコトコト、ブクブクと炊いた。音と匂いの為かメイドが掃除に来た。『今日はしなくて良い。』と言うと『〇〇コムサ、コムサ』と言う。部屋には入れられないのでチップを渡して『今日は良い。』と言うと『メルシー』とにこやかに行ってしまった。我々は彼女のことを「コムサおばさん」と名付けることにした。のん子さんは料理、栄養に詳しく随分教えて頂いた。ご飯が炊けるようになると、キュウリ、人参、レタス、オイルサーデン等でサラダを沢山作った。外食が多く、野菜不足になっていたのも、とても美味しく感じた。

7月14日パリ祭見物に行った。パレードは軍事力を見せつける事が目的という印象。パレードの後には馬の落し物が



ロンシャンに行くため、レンタカーフォルクスワーゲン車でちょっとオスマンののん子さん

いっぱい残っている。此の時ストローの必要性をのん子さんが教えて下さった。

7月末、二人でロンシャンに行こうと、スイスでレンタカーを借り、のん子さんの名ナビでアウトバーンや田舎道を走った。教会は写真よりずっと素晴らしく、日暮れまでずっと眺めていた。そして、東京タワーとほぼ同じ頃建てられたストウツガルトのタワーを見に行ったら。二人でドイツ人の獨創性に拍手をおくり、エッフェル塔の二番煎じの東京タワーを思い、日本人であることを恥じた。

それから、フランクフルトで車を返し、2日後にミラノで落ち合う約束をして、のん子さんはケルンに大聖堂の見学とドイツビールを飲みに行き、私はウィーンの街に見物とケーキを食べに行くために別れた。ミラノ駅で無事再会し、ホテルに荷物を置きに行くと、あまりハンサムではないマネージャーが飛び出して来て、二人ともキスされてしまった。のん子さんが部屋で「良く手を洗おうね」と石鹸でゴシゴシ洗っていたのがおかしかった。ローマ見学を終え、パリに戻ると、のん子さんが「私、1年間パリに居るつもり、おちえさん一緒に残ろうよ！」と誘って下さったが、仕事の都合で私は8月末帰国した。

1年後、のん子さんは帰国された。「これ、のん子が働いたお金で買ったんだよ、あの時は貧乏だったから何も買えなかったものね！」とカメオのブローチをお土産に頂いた。

優しいのん子さん。あちらの世界で再会した時は、又よろしくね！



集合住宅建設現場見学の後、お茶を飲みながら、角砂糖を使って設計説明する見学者たち。左から2人目中原、右草野。

年	1963 (第1回)	1969 (第2回)	1972 (第3回)
開催都市	パリ	モナコ	ブカレスト

The 1st Congress in Paris

KUSANO Chieko

In 1963, Prof. Nobuko Nakahara and I left Japan for Paris, where the 1st UIFA Congress was held. Nobuko took the sea route while I took the air route. In Paris, Nobuko presented architecture designed by Japanese women architects, and I presented Japan's other noted architecture. We were involved in various field tours, such as visiting a housing complex construction site. We also enjoyed a tour visiting the renowned architecture in Ronchamp, Stuttgart, Frankfurt and Milan. After that, Nobuko worked in Paris for a year. When she returned to Japan, she presented me with a cameo brooch. I want to say, "Sweet Nobuko, let's reunite in the afterworld!" (N.K.)

The 4th Congress in Ramsar

FUNATSU Takako

Professor Nakahara and 30 members of UIFA left Tokyo for Ramsar, Iran on Oct. 10, 1976. We arrived at Ramsar, a small village on the Caspian Seacoast, and

stayed at a hotel owned by the Iranian royal family. There was a cheerful atmosphere at the opening ceremony, but the party became tense when the Queen and the high officials of Iran attended. During our session, Professor Nakahara presented the activities of PODOKO, which was founded by Japanese women architects. I was especially impressed when she showed up at the party; she was dressed in a fabulous kimono. Professor Nakahara led us to found UIFA Japon. I greatly appreciate the achievements she helped us attain, and I pray for the repose of her soul. (N.K.)

The 7th Congress in Berlin

KAWASHIMA Yukie

I first met Professor Nakahara at the preparation meeting for the 4th UIFA Congress that was held in Iran in October 1976. Since then she had been my mentor both officially and privately. The 7th UIFA Congress was held in Berlin in October 1984 with the theme, *The History of Female Architects in the 20th Century*. Although Professor Nakahara could not be with us, eight of us participated in the conference, along with 250 participants from 47 countries. There were 80 panels exhib-

Special Focus: Prof. Nobuko Nakahara at UIFA World Congresses

It has been 45 years since the first UIFA congress was held in Paris. Many animated meetings and international exchanges have taken place 15 times in 13 cities. Here we share our experiences with UIFA Japon Founding President Nobuko Nakahara.

● 第4回ラムサル大会

船津 貴子

1976年10月10日中原団長のもとラムサル大会に出席する一行14名は、羽田空港よりイラン航空の機でテヘランへ向けて飛び立ちました。このツアーに私が参加したのは中原さんから、「イランは滅多に行けない国だから是非一緒に行きましょう」と電話で懇切なお誘いを受けたのと、イランについての勉強会のお知らせを頂いたのがきっかけでした。11日テヘラン到着後、ホテルで一行のブッキングが入っていないと言うアクシデントに見舞われた出だしでしたが、なんとか泊ることが出来、翌12日、各国から参加の人たちと一緒にバスで険しい山越えの後、カスピ海沿いの小村ラムサルにあるイラン王室所有のホテルに入ることが出来ました。ここで12日から一途中絨毯を織る山村への小旅行をはさんで16日迄会議が開催されました。

開会式はファラー王妃ご臨席のもと、おつきの女官や建設大臣等の高官も列席して緊張した空気の中にも華やかな雰囲気でした。その後参加者は国別に長く一列に並び王妃が一人々々に握手をして歩かれ、感激一入でした。王妃との午餐会では各国代表とともに日本代表として中原さんは藍の鮫小紋のお着物でお席に着かれました。実はイランからの招待状に王妃御出席の晩餐会にはローブデコルテを着用のことと言うプロトコールに関する文言があり、若年の私たちは困ってフランスの本部へ問い合わせたところ電話の向こうで“キモノ、キモノ”と叫んだのを受けて、夜のパーティーには白地に芭蕉の葉を大きく染めた訪問着をお召しの中原さんを



ベルセボリスへの移動日、休憩所でランチ



開会式のあと、一列に並んでファラ王妃と握手をする日本勢

先頭に、ロングドレスと和服で一同華やかに女性建築家の国際社会への初御目見得を果しました。会議では中原さんがポドコの結成以来の日本の女性建築家の活動を発表されました。

この会議が今日のUIFA JAPONに繋がる貴重な第一歩であったものと思ひ、常に先頭に立って導いてくださった中原さんにあらためて厚く感謝の念を捧げ、謹んでご冥福を祈ります。

● 第7回ベルリン大会

川嶋 幸江

1976年10月13日～16日にイランで開催された第4回UIFA世界大会に参加するために、その打ち合わせ会で初めて中原先生とお会いし、それから、公私ともに、ご指導いただくようになった。第7回UIFA世界大会・1984年10月10日～14日・西ドイツの西ベルリンのベルリン工科大学数学学部で開催(中原先生は欠席)。講演発表とパネル展示テーマの内容は「女性建築家の歴史—20Cにおける女性建築家とデザイナーの歴史」小テーマは「①住まいと居住環境(衛星都市と自然発生都市の質の比較・自助住宅プロジェクトと住民参加協同プロジェクト・女性による女性のためのデザインプロジェクト・老人のための住まい・自然的建物と歴史的建物の再利用)②各国における計画手法とその貢献度③建築原論とその貢献度及び建築気質(法則と技術)④建築理念の提案⑤女性建築家の歴史からの発見。」(当時の資料による)等であった。参加国47カ国、参加者250名、パネル展示80枚。日本からは飯島静江(発表)、船津貴子(発表と展示)、山田規矩子(展示)、松川淳子、日高たか子、西川加彌、中岡真由美(展示)、川嶋幸江、の計8名が参加した。この時代のベルリンは高さ約5m、厚さ2m、全長45kmにもわたる壁が、西ベルリンと東ベルリンを分断し、西ベルリンは東ドイツに囲まれた陸の孤島で、緊張を強いられた大会であった。1998年日本で大会が開催された時には中原先生が「御亭主」のお茶会が清澄公園内の茶室で催され、慣れない着物姿でそのお手伝いをさせていただいた事、また、個人的には勤務していた短大の件で、色々ご相談に乗っていただいた事などが懐かしく思い出される。



会場のベルリン工科大学講堂での発表風景 (写・)

1976 (第4回)	1979 (第5回)	1983 (第6回)	1984 (第7回)
ラムサル	シアトル	パリ	ベルリン

ited at the Technische Universität Berlin, Department of Mathematics. At that time, the Berlin Wall still stood 5m high, 2m thick and 45km long, dividing the city of Berlin. West Berlin was surrounded by East Germany, a circumstance that made us nervous. Twelve years later, when the Conference was held in Japan, Professor Nakahara served tea in the teahouse at Kiyosumi Park, and I assisted her as a server wearing a kimono. I often think of Professor Nakahara, who gave me advice whenever I had a problem in my work at the college. I miss her. (A.T.)

The 10th Congress in Capetown

IJIMA Shizue

The 10th UIFA Congress was held in Cape Town, South Africa in March 1993. Professor Nakahara had been with us at almost every conference since I first attended the 4th Congress in Iran. As I had never been to Africa, I was so excited about going and tried to enjoy myself. The refined opening ceremony was very impressive. On the second day, when we were in a taxi returning to the hotel, Professor Nakahara suddenly asked me to translate her presentation for the next day. I could not refuse because she was a senior colleague. Her theme was the Japa-

nese teahouse, which was not my field at the time. I struggled to translate her speech all night long using a pocket-size dictionary, and completed it a few minutes before our departure for the morning session. The presentation went very well with the help of her photo slide show. I will never forget the great taste of the beer that Professor Nakahara treated me to at lunch. (A.T.)

KOWATARI Kayoko

The 1st UIFA Congress held after UIFA Japon was established was in Cape Town, South Africa. Professor Nakahara and I attended the Congress. There were not many participants because there was a boycott due to apartheid at the time. She and I shared a hotel room and I was nervous because she was a noted architect. However, she made me relaxed, and we enjoyed talking in a congenial atmosphere about the many tea ceremony rooms she had designed. Since Cape Town was not very safe, the 36 tour participants always went together in the same bus, traveling about 500 km a day for two weeks. I will always be deeply grateful for these memories of spending time with Professor Nakahara.

● 第10回ケープタウン大会

飯島 静江

1993年3月第10回UIFA国際会議は南アフリカ共和国のケープタウンで開催されました。これまでイランでの第4回ラムサール大会に初参加して以来、ほとんど毎回中原会長とご一緒しました。

初めてのアフリカ訪問 ケープタウンと言えば最南端の喜望峰、1652年東インド会社により建設された東ア・インド・東アジア貿易に携るオランダ船の補給基地、アパルトヘイト反対運動を唱え、長い投獄生活に耐え遂に成功を勝ち取った南ア初の黒人大統領ネルソン・マンデラ氏、かつて長い間英・仏の植民地であった後の今の町と人々の在りよう等興味は尽きず、期待に胸を弾ませ南ア大会に出掛けました。そのためこの会議では自らに何の役目も課さず、ホテルも日本からのご一行様と別に取り、自分の時間作りに専念しました。

開会式での陽気なセレモニー、意外にも洗練された行事の進行、そしてセッションの部に入って2日目終了。ホテルへ帰る車の中での想像を絶する中原会長からのご依頼。何と翌日発表されるスピーチの翻訳と当日の英文の代読を頼まれたのです。UIFA会長ドラツウールさんの覚えいと高い日本のセレブ、しかも大先輩からのお話、断る訳にはまいりません。演題は日本建築の茶室紹介、これまで茶道の心得も無く、使われている用語の説明も不確か、しかも手元には小さな英和辞典だけ。作業は困難を極めなんとかでっち上げたのが翌朝、もう出掛ける時間。予想外の南アでの徹夜でした。その日午前の発表はご用意されたスライドに助けられ、なんとか無事終了。その後中原会長にご馳走になった昼食でのビールの実に美味だったこと、今でもあの味が忘れられません。



歓迎セレモニーの行進

小渡 佳代子

日本大会のためにユイファジャポンが結成され、最初の大会が南ア大会でした。中原会長の素適な写真のニューズレター1号を携え、大会を日本に誘致する目的を持って参加しました。女性建築家の憧れでもある大先輩から「夜倒れても一人では困るので同室にお願いできるかしら」とお電話をいただき、会議とツアーの

18日間をいっしょにすごさせていただきました。特に、アパルトヘイトの問題など世界中が経済封鎖をしている時でしたから、ボイコット運動もあり参加者は南アの人を除くと50数人でした。発表の前日にホテルでスライドを並べ飯島さんと英訳するお手伝いをしながら会長の度胸の大きさに驚かされました。緊張している私に「あなた日本茶を美味しく入れるわね」の一言で気持ちが和らぎお茶談義。多くのお茶室を手がけられ、お茶会のお話など実業家の一面や「3人でやってきたからできたよ」と設計事務所のお話など、今でも一つ一つが私の心に強く残っています。



ドックだった会議場にUIFAのフラッグが飾られ、開会の時には中原先生が競り落とした。



住宅大臣の官邸でクロージングパーティ

治安が悪いためケープタウン以外は個人行動が難しく、ツアー参加者36人がいつも一緒のバスでした。2週間近く毎日真つ暗な人気のない道を500キロ近く移動、街の明かりが見えると歓声が上がりました。時にはベッドがダブルになっていて別々に分けながら大笑もしました。思い出は尽きませんがご冥福をお祈りいたします。

● 第11回ブダペスト大会

小川 信子

第11回世界大会が、ハンガリーの首都、ブダペストで1996年に行われた。会議場は、ドナウ河沿に建つ絢爛豪華な国会議事堂である。外観の美と相まって、そのインテリアは実に見事であった。設備や諸機能も秀れていて、今で言う、エコ技術を工夫した装置であり、大変興味深い建築であった。

この大会には35カ国、200人が参加し、盛大な催となった。会場の性格から、厳しい入場チェックがあり一瞬、緊張が走る。議



会議場となった国会議事堂外観

1992年UIFA JAPON 設立

1988 (第8回)	1991 (第9回)	1993 (第10回)	1996 (第11回)
ワシントン	コペンハーゲン	ケープタウン	ブダペスト

The 11th Congress in Budapest

OGAWA Nobuko

The 11th Congress was held at the National Congress Hall on the Danube in Budapest, Hungary in 1996. The exterior and interior of the building was splendid. The equipment and functions were also excellent, equivalent to the eco-technology of today. Some 200 participants from 35 countries gathered at the conference. There was a thorough entrance check that made us nervous. Professor Nakahara and I gave a presentation entitled *Women and Housing* that traced the history of Japanese female architects after WWII, including PODOKO activities. I was extremely nervous during the presentation and our speech did not match the slide show. In spite of my panic, Professor Nakahara was very calm and kept up the rhythm of our speech. It was a great help for me and I admired her dignity. She was always calm and positive when establishing the foundations of UIFA Japan. I would like to express my gratitude for her distinguished accomplishment. (A.T.)

The 12th Congress in Tokyo

MATSUKAWA Junko

Professor Nakahara affected us profoundly as one of the female pioneers of architectural design and research in Japan. Since the establishment of UIFA Japan in 1992, I had many opportunities to share time with her. Through various events and meetings, such as the monthly board meetings of UIFA Japan, Japan-South Korea Exchanges (1994), the Congress of UIFA in Budapest (1996), the Congress of UIFA in Japan (1998), and the Exhibition on Women and Architecture at the Center for the Advancement of Working Women (2002), I was always inspired by her never-surrender attitude and energetic activities. I am still clinging to her memory. Despite her elevated position, she accepted young students such as myself to be equals, like rivals in the same field. Now I realize that this was one of the most attractive personality traits of Professor Nakahara. She shall be sadly missed and warmly remembered.

場の中央に演壇があり、馬蹄型に座席が並び、階段状で、演壇に立つと人々の視線が集中し厳しさを感じられた。

中原会長と私は、「すまいをめぐる女性—女性建築家の戦後史を辿りながら—」と題して、日本に戦後女性建築家が誕生し、PODOKOの活動が発足してから現在までの流れと、各人の作品



絢爛豪華な文様のある会議場での日本議長団（東、飯島、松川、中原先生）（写松）

を発表した。私は緊張の極に達していて、話しのテンポが狂い、スライドの操作と食い違い、2人3脚が噛み合わず大わらわであった。ところが、中原会長は、四苦八苦していた私とは対照的に毅然と構えて、彼女のテンポは乱れなかったで、大いに助けられた。さすが大御所の貫禄に脱帽したものである。あの時を想い出す毎に、沈着冷静に物事を処理した中原会長の姿が浮かび、前向きの判断力が今日のUIFA JAPONの基礎を作られたのだと、その功績に感謝をしている。

● 第12回東京大会

松川 淳子

ぼんやりと存じ上げていただけた中原先生と、直接お付き合いするようになったのは、



閉会式。参加国全代表がそろって各国の国旗を持って舞台上がった。

UIFAの日本支部をつくらう、という声が女性建築家たちの間に高まってきてからのことである。林・山田・中原設計同人で何回か打ち合わせを重ね、日本支部の結成にこぎつけた。中原先生とのお付き合いが始まったのは、打ち合わせの当初は設計同人に置くことに決まっていたUIFA JAPONの事務局を、「松川さん、あなたの会社に置くことにして頂戴。三人でそうしようということになったの」と変更をいってこれたときのことからである。

「英語やフランス語の手紙なんか来ても処理したくない、事務局の雑用はごめんこうむりたい！」というのが設計同人の三先生のご意向だと伺った。この「命令」に近いご発言で、事務局のその後が決まった。

日本支部を作った後、1996年のハンガリー（ブダペスト）大会には、すでに「次回大会は、日本で！」ということを決めて臨んだ。中原会長、小川副会長による発表をすること、UIFA JAPONのパンフレットを参加者に配布すること、閉会式で中原先生とハンガリー代表のフェイエッシュさんが国旗交換をすること、私が招致演説をすることなど、すべてうまくいくかどうか、私はかなり心配で緊張していたが、中原先生はこういう時にはとても頼もしく、「いいのよ、なんとかなるに決まっているんだから」と落ち着いてほとんど準備しないで構えていらした。ふたを開けてみると、おっしゃるとおりで、大拍手のうちに、「今回は日本で」ということが決まった。



清澄庭園のお茶会での中原先生のお点前

日本大会までの準備の2年間は、目の回るほど忙しいものだった。中原先生は、ご自分から積極的に企画したりなさらなかったが、実行委員会で私たちが考えるたいのことは賛成してくださって、記者会見やお金集めやらと、あちこちと先生を引っ張りまわす実行委員長の私をフォローしてくださった。全体に「よきにはからえ」という態度でいらした中で、清澄庭園でのお茶会には大変熱を入れられ、ご自身でお道具をそろえ、搬入や搬出も含めて指揮をとられた。「お茶会だけはすべて自分がやらなければ！」と、思っていたらと思う。おかげさまで、清澄庭園のお茶会は、いまだに外国へ行くとき「あれはすばらしかった！」と、思い出を語ってくださる方がたくさんいる。

つきない思い出を振り返ると、あらためて中原先生の魅力は、大家ぶったりしないで、私たちと対等に競争意識を持って付き合ってくださったことにあると思う。それは、後輩の私たちにとって、どんなにか刺激的で、ありがたいお付き合いだったか、はかりしれない。



清澄庭園歓迎茶会で中原先生を囲んだ集合写真（写井）

1998 (第12回)	2001 (第13回)	2004 (第14回)	2007 (第15回)
東京	ウィーン	トゥールーズ	ブカレスト

■会員の本「鎌倉『まちのいろは』」

冬花社：鎌倉いろはの会著

渡邊 喜代美

会員の山田初江さんも発起人のお1人。

「まちのいろは」は「明日の鎌倉のために」と愛情いっぱい、楽しい本である。明日の鎌倉はどうなるのだろう、美しい自然は守っていくのか、日々そのすがたを変えて行く鎌倉のまちの大切さを見つめなおそうと、「鎌倉いろはの会」は、2005年秋に「いろは講座」を開講した。市民と行政が両輪となった。中学校、高等学校、市民グループなどで、講師の熱意と聞き手の探究心で講座は大いに盛り上がった。これを、子どもから大人まで、誰にでも読んでもらえる本にしようと、「まちのいろは」は、歴史や暮らしや景色が未来につながることを願ってつくられた。

Member's Publication:

“Kamakura, Machi no Iroha”



みどりの帯に内藤廣（建築家・東京大学大学院教授）は、こんな風に書いている。

「まちのれきはみんなのもの まちのくらしもみんなのもの まちのけしきもみんなのもの だからみんなで育てよう、育てる心を育てよう この本は、みんなをそんな気持ちにさせてくれる」>このまちにも、あなたの座右にも、ぜひ、ほしい一冊です。

連絡先

TEL:0467-23-7605、FAX:0467-23-7780

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町2-5-4
第2押田ビル 榎生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2008年11月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

魅力的なリノベーション No. 2

Attractive Renovations N.2

旧安田楠雄邸一住み続けられた名住宅の保存と公開 谷村留都
The Former Yasuda House TANIMURA Rutsu



雁行しているプランの中間部は2階建て第二の茶室を持つ。応接間の前のゴムタイルの敷かれたサンルームを見おろす。

秋晴れの土曜日、フェルメール展を見た後、上野公園から続く道を楽しみながら現地に着いた。旧安田楠雄邸は藤田好三郎が大正期に建てた住宅を安田家が入手し居住していた。平成7年、主人亡き後奥様が、地元の建築家グループの応援を受け、500坪以上あった敷地の一部を売った資金でコンパクトな住宅を建設し、本体の部分はそれを維持するために日本ナショナルトラストに寄付した。ボランティアの協力により10年の歳月を経て一般公開にこぎつけた。当時の邸宅として広いとはいえない、間口に比べ奥行きが深い敷地に中廊下型のプランを雁行させ配置している。これは敷地の形状に対する工夫であるが、雁行部分がうまくゾーニングされ、豊かな空間を生み出している。サンルーム付応接間、中央に配置された茶の間、天窓による明かりの工夫をしたモダンなキッチンなど、この時代の住宅が伝統的、格式的な住まいから新しい、家族を中心とした住まいへ移行している様子がうかがえた。ガラス、ゴムタイルなど新しい素材の採用と同時に高度な技術の畳床、建具、照明器具など、生活を豊かにしながら日本建築のよさを生かした工夫が随所に見られた。(住宅建築2007年12月号参照)



玄関。建物全体の床下にはコンクリートが敷きつめてあり、無窓で換気を選択できる。15cmの換気スリットがトイレと前室の壁面を一巡している。



トップライトで明るく照らされたキッチン、サービスヤードに繋がっている。



1F茶の間南側外観。靴脱ぎ石は幅8尺近い。(写中)

旧安田邸見学会は「この指とまれ！」として2008年10月18日に実施された。参加22名。角野茂勝氏の丁寧な解説も好評だった。図面はp.1参照

役員会報告

□第5回9月10日：小林純子理事が今年度のエイボン女性大賞に内定し、副賞50万円寄付先としてUIFAを指名。ありがたく受諾を決定。故中原先生とIAWAの記念事業の検討。海外交流の会第44回について総評と収支報告。第45回の講師は篠崎雅彦氏、第46回は山田幸正氏に決定。災害復興見守りチーム活動報告として「オープンガーデンモニターツアー」他の報告。ASFA組活動報告。ニュースレター英文併記77号企画報告と意見交換。この指とまれ「安田楠雄邸見学」検討。ルーマニア大会記録進捗状況報告。

□第6回10月14日：総会議事録署名完了報告。ニュースレター77号企画報告。海外交流の会第45回、46回準備状況報告。45回は、12月6日、於東洋大学白山校舎。この指とまれ申し込み状況報告。IAWAアドバイザー会議準備状況報告。ルーマニア大会記録進捗状況報告。

災害復興見守りチーム Disaster Support Team

「法末集落オープンガーデン
モニターツアー」 正宗量子
Open Garden Tour in Hossue
MASAMUNE Kazuko



9月7日(日)明大前駅を出発したバスは、一路新潟・法末に向かった。主な参加は駒沢女子大の学生。バス内で渡された画版とパンフレットには詳細な図解入り集落の訪問ガーデンが描かれ用意万端だ。集落は、7割が70歳以上だ。午後からA、Bの2グループに分かれ3家庭の美しい花や野菜に彩られたガーデンを見学した。農作業中の手を休めたおばあさんや、おばさんの解説付き案内に舌を巻いたのだった。見たこともない草花！雪割草、初雪草、半化粧、段菊、澤槿、ブツレア、アルストメリア(百合水仙)、アゲラタム、等等。丹精こめて道端にまで白い菫の花を咲かせ道行く人々の心を和ませてくれる集落のガーデンは、都会にはあり得ない人と大地の恵みが溶け合った地方に学ぶ美しい暮らしのスパイスがあった。



とよこさんとみねよしさんのステゴケの庭 (写渡)

ASFA 組の活動

ASFA Team Activities

楊 英美
YANG Yingmei

去る8月20、21日に横浜市創造界隈 ZAIM 主催の「夏休み子どもまつり」において、「ふにやとさかにゃの Welcome Toilet」ワークショップをおこないました。ワークショップの企画、運営は ASFA 組でおこない、イベント全体を ZAIM が企画運営しました。毎年恒例となりつつあり、近隣地域から多数の親子が参加しました。
＜ワークショップのプロセス＞
1. はじめは普通の殺風景なトイレだったので、まず天井の中央を青く塗りました。
2. 外の壁にあいていた大きな穴に遺跡発見に見立て、モザイク作家に舟と魚の絵の制作をお願いしました。
3. 内扉を含む壁面に、海面の写真をプリントアウトしたシートを貼りました。
4. 子どもたちがトレペの折り紙や、雑誌の切り抜きや、スポンジ印刷で、さかなやふねをつくりました。
5. それらを子どもたちがトイレの中に飾り付けていきました。

天井にはくじらの大群が泳ぎ壁には見たこともない熱帯魚や海藻が、鏡の中にも色とりどりのさかなが泳いで、いつでも子どもたちを迎えてくれるトイレになりました。この後も、子どもたちがつくってくれたこの ZAIM 本館 4F のトイレは、そのままの形で使用されています。



ふにやとさかにゃの Welcome Toilet 完成写真



制作中の子ども達 (写岩)

編集後記

Congratulations on marking the 45th year of UIFA! As you look at the past and identify important architectural concerns for the future, I'm pleased that I can help you share your views with all your colleagues around the world. (Karen Sevens) 1963年バリ、若き中原暢子、ソランジュ・デルベツ・ド・ラ・トゥールUIFA会長の情熱と理想を思ふ。(渡邊) 77号にはいろいろな「時間」が詰まっています。(在塚) 45年前ロサンジェンに見られたはずの中原先生、同じ思いを共に出来ることがうれしい。(井出) 参道に山野草植えて法末冬ごもり(須永) 毎度原稿を読みふけっちゃっています(飯田) オリピックも含め、都市の記憶をどう継承するのか。建築家の役割は大きい。(石川) 新しい編集メンバーを迎え密度の濃い英文併記号になりました。(田中) 英文づくりは、キャンレンさんのおかげで勉強になり、得した気分です。(古村) 旧安田邸の京間東間中間のコラボレーションと職人団、そして設計士がすごい。快適な居住空間が時代を超えた。(中野)

抄訳は、田中厚子=A.T. 古村伸子=N.K. 中野晶子=A.N. 付記のないものは、執筆者自ら抄訳。写真は原則執筆者撮影。右記はそれ以外の撮影者。写渡は渡邊喜代美。写松は松川淳子。写井は井出幸子。写岩は岩崎恵子。写中は中野晶子。写！は不明。